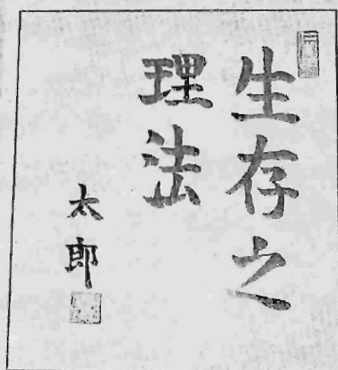


# 生存科学研究所 ニュース

Vol.1. No.3.

1986. 5. 10発行



## 目 次

- 感情の文法 生存科学研究所副理事長 藤井 隆…………… 1
- 『科学と人間』の会議…………… 2
- ニューロサイエンスの新しい展開 第1回公開講演会…………… 4
- 健康政策研究委員会…………… 6
- 第2回ハーバード大学武見講座国際シンポジウム・プログラム…………… 8
- 武見太郎先生文献目録の作成計画…………… 10
- エッセイズ・キュート…………… 12
- 維持会員だより…………… 13
- ニュース・オブ・ニュース…………… 14
- 後記…………… 15

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

電話 03-563-3518

## 感情の文法

藤井 隆

ヘラクレイトスの言葉と伝えられるものに、「クモが巣の中央に坐っていて、ハエが糸の一部を引き裂くとすぐそのこわれた糸を気遣ってその場所に急ぐように、人間の魂（プシユケー）は、それと離れがたく結びついている身体のどこかが傷つけられると、あたかもそのことを憤慨するかの如く、すぐ急ぎその傷の場所に飛んで行く」というのがある。

ギリシアの昔にも、クモが巣を張っていて、それをヘラクレイトスのような哲人が眺めながら、こんな事を考えていたのかと思うと、何か心が遠い昔に遊ぶような気がする。人間の魂が傷の場所へ飛んで行くというのが面白い。この「断片」の中の言葉は、どのような意味にも考えられるだろうが、また、哲学者が何と言われるか解らないが、私は勝手に、ここで言う心の動きは、感情の動きのことを述べているもののように感じた。

クモは実際、懸かったハエの形を見るのではなく、糸の引かれる力を触感覚で感じて動くので、小動物を見える距離にわざと人間が置いてやると、それを見て驚いて逃げるといふ。このことは、フォン・ユクスキュルという生物学者の「理論生物学(Theoretische Biologie)」の中に記されている。つまり、クモでは視空間と触空間とが一致していない。従って、人間が見るのと同じ「物」もない。一般に、動物はおのおのの「世界」の中に閉じ込められて、ただ恍として生きていて、人間だけが或る距離をもって開かれた世界に対して。その或る距離をもって外の世界に

対し、また、自らの心にも対峙しているのが人間における精神というものだ。クモにとつては、巣もその周囲も身体の一部に過ぎない。

さて、人間にとって感情とは何か。人間は外の世界に対しては自由を獲得してきたと言っても、動物がその「世界」に縛られると同程度に、身体の内部の状態に起因する感情や気分にはやはり縛られている。われわれがいかに知性を有つ理性的な存在であることを誇っても、<sup>みづか</sup>自らの感情は如何ともすることができず、内部に生起する何事かに左右されて、すぐおこったり何かする。

ヘラクレイトスのこの言葉は、心の動きを、クモの動きと同じように、唯あるがままの魂の自然史(natural history)として見ているものとも読める。心の動きのかなりの部分は人為造作を超えた自らのもので、人間の自然史に属しているのではなからうか。だから彼はまた「断片」の別の箇所では、激しい感情と闘うことの困難さを説いている。「怒りその他の激情と闘うことは難しい、激情はその欲するものを、いのち(プシユケー)をさえ代償にして得ようとする。」と。その頃は精神分析などという言葉はなかったのだろうが、古代の哲人の方が却ってあるがままの人間の本性や心をしかと理解していたようにも思われる。魂の自然史とそれを自知する精神と。

いつか或る高名な文学者から、生物学も近頃は大分進んだようだが、将来は、生物学によって、感情の文法<sup>グラマ</sup>というようなものが解ら

ないかと、ふと訊かれたが、それはどうも無理のようだ。人間にできることは、いつになっても、たかだか心をあちこちと飛ぶがままにしておき、唯それを眺める位のことが。

植物も動物も生きてるとわれわれは常識的に考えているが、「生命は一つ (unity of life)」と確実に言えるようになったのは、生物学の歴史のなかで、植物も動物もひとしく細胞から成り立っていることが明らかにされた結果である。植物も動物も同一の遺伝物質 (DNA) によって、この地球上における連続性を保証されていることもその例となる。「生命は一つ」ということが明らかにされたからこそ、今日のように生命の問題を科学的に解明する道が新しく開けてきたのである。しかし、そうだからと言って、生命をあまり安易に、単に技術的に制御できるものと考えすることは恐らく正しくないだろう。生命を全体として理解するためには、生命という言葉はかなり多義的だと考えておいた方がよさそうである。

上に、魂の自然史ということをやったが、

一般に生命の問題を考えて行く上に、自然史的立場はやはり大切で、われわれが左右交互に足を動かす歩行 (stepping) も、食べるのも、病気になるのも、人間の自然史の枠内のことだ。病気を治すのは医学かも知れないが、病気が癒えるのは人間の自然史である。この頃、わが国では、自然史というと何か古い学問のように思われているが、この言葉は例えば、英国などでは大切な言葉で、哲学者でさえ、「これは人間のナチュラール・ヒストリーに属する」などと言う。先年、私は武見先生にかなり長時間、対談ということでお話を伺ったことがある。その際も、この自然史の見方が生命を考える上で重要だという話になったことを思い出し、感情ということ为例にとって、人間の自然史について、たどたどしく書きつらねたのである。私などにとって「生」というものはやはり難しく、わからない問題である。ヘラクレイトスはまた、「上ぎげんで快活であることが人生の目標だ」とも言っていると伝えられる。これも何でもないようだが、そこにはわれわれ凡愚には解らない深い意味があるのかも知れない。

## 『科学と人間』の会議

前回に引続いて第2回会議の概要を報告します。

第2回の会議は碧海純一 (放送大学教授) 委員が指定発言を行った。それは、「現代科学技術の問題」と「人間行動における生得的なもの」と二課題について話題を提供した。A) 第一課題の内容は科学技術という言葉があるがこれについてどう考えるかという点から始った。科学と技術との境はどこにあるか

という。それは相即相入の関係で区別しにくいもので、連続的スペクトルである。しかし科学というものがその応用である技術を通じて19世紀後半以来社会に貢献しているのは事実である。そして科学は最近はグループで研究するというものに発展しているが、一人で孤独でやるという仕事は依然として存在している。そして科学には必ずしも技術に直結しないものが多々あって、それは真理の探究と

してそれ自体に価値を認めるということが必要であることを強調した。

次に、その科学のもたらす成果について、バートランドラッセルの「科学的なものの考え方は人間の本性に反する。」という例をあげ、科学の真理の探究ということが時には人間に不愉快な感情をおこさせるものであることも知っておかねばならない。そしてその科学が日本では、とくに第二次大戦後に大きく飛躍した。その結果として、科学と人類の幸福の増進との調和と信仰について反省がでてきた。その具体例として環境問題或いは公害問題をあげた。このような科学史の背景にもとづいて、今日の科学と社会の問題について論じた。その結果、科学を三つに分けて考えたいということで以下のような分類を示した。

◎は、科学そのものの価値を認める立場、それは真理の愛 (Amor veritatis) ということで、真理の発見そのものに価値があるというものである。現代はこのようなことを忘れてきているらしいがある。

◎は、ドイツフランクフルト学派の立場、つまり科学技術は一つの歴史的現象で、その時代は終りつつあるという説である。それを「科学イデオロギー論」と名づけている。

◎は、宗教や倫理の観点から科学を批判する考え方で、つまり分子生物学の進歩で、遺伝子の秘密というものをこれ以上解明していくことは、神に反するような行為であると考える立場である。これを倫理的、宗教的反科学主義と呼んでいる。

このような科学に対する立場を分類して、日本人は憲法9条との関係で、防衛に大きな費用を使うことに対して国民的な強い抵抗があつて使わないでいる。それはそれでよいで

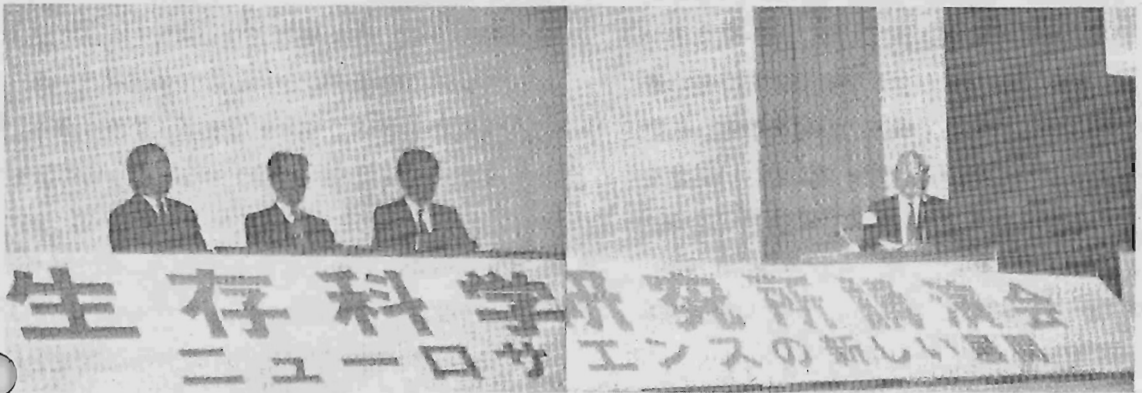
あろう。ではその分の資金とか、人材を投入して核融合とか宇宙開発とかそういう巨大科学に取り組んでいるかというところでもない。このような巨大科学に積極的に取り組むことが日本国民に対してだけでなく、全世界に対する日本の責務ではないかと結んでいる。

B) 第二の課題は、人間の行動、特に社会的な行動における生得的なものと後天的なものについての考えを述べた。言語学におけるチョムスキー理論における仮説についてふれた。それは「普遍文法」というものが既に生得的に組み込まれているというもので、学習によっているのではなく生得のプログラムの発現であるところに興味をもつというものである。またローレンツのインプリンティング(刷り込み)が人間を考える場合重要であることにもふれた。これら二人の説は言語獲得の能力と結びつくもので、たとえば第一言語獲得が8~9才で終るがその獲得は大事であつて、これによって第二言語の獲得に結びつくというものである。それは人間行動の中でいちばん人間的と思われる言語行動に結びつくと考えられるがゆえに大事である。このようなことから教育と関係して、「人間行動における生得的なもの」の見直しの必要性を示唆した。

この後村上陽一郎氏から発言があり科学史的な立場から、碧海委員の科学の三つの分類が妥当かどうかについて論じた。さらに数人の委員から教育問題も含めた認識論とか、脳や行動についての発言があり、活発な議論が展開された。

なおこの内容については事務局としての責任でまとめたもので、完全に全容を伝えているわけではないことをおことわりいたしておきます。

## ニューロサイエンスの新しい展開—生存科学研究所主催第一回公開講演会—



西村 健教授 吉田 博教授 久保田 競教授

山村雄一先生

3月1日午後1時より、大阪、商工会議所国際会議場において、生存科学研究所主催の第一回講演会が「ニューロサイエンスの新しい展開」をテーマにして行われた。この講演会の開催は、当研究所顧問、大阪大学前学長山村雄一先生の総括的企画、準備と、大阪大学医学部第一内科の先生方、関西、中部等の医師会の先生方の全面的な協力によって実現したものである。

開会冒頭挨拶に立った研究所副理事長、日本医学会前会長熊谷洋先生は、研究所の主旨とするライフサイエンス等の研究開発の今後の円滑な推進と、人間生存条件の体系的整理のための調査研究が本日の講演会の目的であるとし、それが、人類の健康な生存基盤を確立するという故武見太郎先生のご遺志であることを述べられた。

その後研究所理事、上智大学生命科学研究所長青木清教授を座長として、以下の3人の先生から講演があり、次いで山村雄一先生を司会としてパネル討論が行なわれた。その要旨は次のとおりである。

\* \* \* \*

「脳生理学の立場から」 京都大学霊長類研究所 久保田競教授

脳の生理学が学問分野として発達したのは19世紀の後半である。本日の主題であるニューロサイエンスという言葉が出来たのは24年前であり、アメリカのMITのシユミト教授により言い始められた。色々な分野の人々を広く集めて、色々なレベルからの研究を統合することがこれからの神経科学の発達のために必要であるとし、このような研究分野をニューロサイエンスと彼は呼んだ。その後この分野は急速に発展しつつある。その学問分野は、脳と行動の関係を研究すること、人間の脳の働きを科学的に理解すること、脳と心の関係を調べることと言える。脳と、それが働いて外に起す現象との関係を、物理学や化学の方法論を使って説明することであるとも言える。生存科学の中では非常に重要な基本的学問分野である。

以上のようにニューロサイエンスについての解説を行った後久保田先生は、1970年以降

の脳生理学の新しい方向、新しい研究技術とそれらによる新しい知見等を述べられた。その一部を紹介すると、脳内モルフィン様物質の発見とそれに関連したレセプター概念の発達、脳のサスペンションを造り、神経細胞を別の個体に移植して動きの回復を観察した動物実験、神経細胞から芽が出て新しい結合を造ることを促す特殊な物質の研究等である。

\* \* \* \* \*

「神経薬理学の立場から」 大阪大学医学部  
吉田博教授

高次の精神活動を営む脳と、それに関わる物質の研究が課題である。脳の神経細胞の特長は興奮性を持ち、それを伝達し、互いに結びつき合って回路を造り、それにより複雑な機能を営むことである。

この細胞間の結び付き（シナプス）が重要である。神経の場合は多くはケミカルシナプスであり、刺激の伝達は一方向性である。

その刺激伝達に関与するのが化学的神経伝達物質（ケミカル・トランスミッター）である。

最近のニューロサイエンスの進歩の一つは、多くの神経活性物質を発見して来たことである。これらが神経伝達物質のクライテリアから伝達物質であると言えるようになるのか、あるいは神経修飾物質（ニューロ・モジュレーター）という形となるのか、またその生理的意義、役割が今後の問題となる。

現在一つの問題となっているのは、コ・トランスミッターと言われるものである。一つはニューロンに何種類もの活性物質が共存していることが解ってきた。それにより機能も変わってくる。

ニューロサイエンスの進歩の第2は、レセ

プターの研究の進歩である。一つのトランスミッターに対して複数のレセプターが存在する。これらのことは非常に特異性の高い、副作用の少ない薬の開発につながるものである。

いま一つの重要なものは、栄養因子（トロフィック・ファクター）である。将来の夢としてはそのようなトロフィック・ファクターやニューロモジュレーター等の研究をベースにして、新しい精神医療薬あるいは予防薬が生まれることが期待される。

それぞれのトピックについてさらに詳細な説明を加えながら吉田先生は以上のように述べられた。

\* \* \* \* \*

「精神神経学の立場から」 大阪大学医学部  
西村健教授

ニューロサイエンスの臨床面における課題の中から、老年精神医学、とくに高齢社会で問題になっている痴呆の問題について述べられた。

生理的老化以上に強い精神機能の老化、とくに知能の老化を来たす状態を痴呆と呼ぶとし、痴呆の定義、症状、疫学、分類、病理を述べられた。

とくにこれから問題になると予想されるアルツハイマー型老年痴呆について詳述され、その発生病理では、アセチルコリン系統のニューロンの活性低下および細胞数の減少が注目されていることを指摘。また治療については本質的なものはまだないが、アセチルコリンの分解系の阻害剤を与えると僅かな効果が短時間見られており、今後の開発の可能性が考えられる。知能や見当識というような人間らしい脳の働き、インテグレイティブなインテリジェンスの働きという意味でNoot-

otropic Drugs (向知性薬)と呼ぶものを開発の目標にしている、と話された。

\* \* \* \*

「パネル討論」司会 山村雄一先生

生理学者から生化学的な話が物質レベルで議論される、これが近年の大きな特色である。神経末端で分泌される神経伝達物質も重要であるが、近頃神経間物質が注目されている。細胞間のインターラクシオンを行う物質として興味が深い。しかしそういう物質があるということがやっと解ったという段階である。トランスミッターやレセプターを介して薬は色々開発されている。モチュレーターやペプチッドや、それらのアンタゴニストに関わるものが開発されることが期待されるが、まだ解っていない。そのことがまた、ペプチッドの生理的機能をはっきりさせていないことにもつながっている。

これに関連して、来場されていた宮崎医大の松尾教授から、細胞間の情報伝達の機能を持つ新しい物質を探索しているが、レセプターのマルチプリシティもあり、情報伝達の網の目を一つ一つ探しているような状況である、との発言があった。

痴呆の研究においては、このような物質へ

一スの研究がやっと始まったところである。そこでは向知性薬としてコリナージックなものを中心に研究が進められているが、ドーパミンやカテコールアミン等と総合的に考えなければならぬという反省期にある。

ここで、生存科学研究所顧問、日本科学哲学学会前会長の大江精三先生から質問があり、血管の障害に効くのではなくて、脳機能そのものを改善させる薬の開発に研究が進んでいるようであるが、そのようなものが人類世界の良い決断に役立つようになり得るのか。そういう希望を持っているが、と問われた。これを受け、司会の山村先生は、今日の段階はともかく、向知性薬という名前には今言われたような願いが中に籠っている。本日の討論の方向から、神経細胞それ自身に根ざす病気に効く薬が将来重要なテーマになる。これから増えてくると予想されるアルツハイマー型痴呆を含めて向知性薬が開発されていくであろう。これからのニューロサイエンスには幾つかの展開があるであろうが、それが一つの非常に重要なポイントであるといえる、と結ばれた。

## 健康政策研究委員会

生存科学研究所顧問、科学哲学学会前会長大江精三先生の言葉を借りれば、健康は「人間行動の引き金『純粋な喜び』の第1に挙げられるもの」である。それゆえにまた健康は、人類生存の重要要件である。

健康を維持増進させるためには、健康のための生存環境、生存資源の保持向上が必要で

あるが、同時にまた健康を維持増進させるための人間の文化的活動が極めて重要である。そのなかには人間の心身に関わる科学としての医学と、その社会的適用としての医療が、疾病の治療と健康の積極的増進の両面に関わる中心的柱として存在する。これらの健康を守る文化活動をどのように展開して行くべき

かという政策、すなわち健康政策の担う役割は極めて大きい。

\* \* \* \*

現在の健康を取巻く諸事情を眺めてみると、医学をはじめ諸科学の進歩と経済の発展により、地球上の東西の格差のような重大な問題を残しながらも、ここ半世紀の人間健康の状態には目を見はる向上が見られる。しかしこのような人間活動の結果として、栄養にも、生活にも、環境にも、そして健康に関わる活動にも色々と新しい問題が生じている。医療に関わる倫理的問題はバイオエシックスとして新しい科学的倫理の開発を必要とし、経済的負担として意識されだした医療費の高騰はデリバリー・システムに抑制的圧力が掛るような状況となってきた。健康を守るための医療に対するこのような状況は、医療ひいては健康に対する認識を変え、人間生存の意欲にさえ影響を与えかねない。

21世紀を目前にして、国内的には高齢化社会の到来をひかえ、地球的には南北問題の解決を迫られ、これからの健康政策のありようは、このような意味で人類の生存に深刻な影響を与えるものと理解される。

\* \* \* \*

健康政策研究委員会は昭和59年度より研究を開始し、同年度の研究成果は「昭和59年度健康政策研究委員会報告」として既に各方面に配布済みである。報告書にあるように、委員会は「健康投資の理論と実証」を中心テーマとしながら、健康政策研究の体系化を総論的にまとめている。

昭和60年度の委員会は、前年度の研究を受継ぎながら、より具体的な研究に取り組むべく、昭和59年度報告書の完成を待って、60年

9月から研究活動を始めている。なお、今年度よりそれまでの真弓忠委員に代って西岡久寿弥委員が参加している。

第1回の委員会においては、今後の研究への取組方について検討を行ったが、その際、バイオエシックスをうけての健康政策に関する合意形成とその実現に関わる戦略とインセンティブの問題、健康教育強化の問題、アジアの医療と日本の役割、医療の自由化と健康投資の問題等の検討の必要、国の健康政策に先行するように時宜を得たものである必要等が論じられ、それらを含むテーマとして「地域医療」が浮かび上がった。

\* \* \* \*

第2回の委員会では、各委員から提出された資料にもとづき、研究テーマにどのような観点から、どのように取組むかが討議された。

討議されたのは以下のような項目である。医療におけるパブリックセクターとプライベートセクターという観点から医療供給体制、医療費の負担、私企業の役割、国際協力における分担等の検討・整理の必要。日本型地域医療の国際的展開における医療の自由化の意義の検討、特に市場経済システムを超えた民間活力モデルの提示の必要。地域医療のニーズを満たす医師会病院機能の検討の必要。地域医療における各種検討項目、特に医療情報システムの具体的な検討。例えば肝炎対策の実践のような国内的ならびに国際的・地域医療推進対策の検討の必要。医療におけるコストエフェクティブネス解析の必要性。等々

その結果、医師会病院の事例の検討と医療情報システムの事例の検討を組合わせて行なうという、ケーススタディーから委員会の研



究を開始することが決まった。

\* \* \* \*

第3回はこの決定を受けて、先ず医師会病院の事例検討がなされ、昭和55年以降に設立されたいわゆる第2世代の医師会病院について、その地域医療機能、地域医療にあてた影響、地域医療経済等の分析がなされた。

今回はこの討議を受けて、更に第1世代の医師会病院、公的病院、私的病院等も検討し、その討議から第3世代の医師会病院、広く全ての病院を含めた意味での将来あるべき第3世代の病院の、地域医療における姿を求めてゆこうという討議計画が決まり、同時に地域医療情報システムについても検討するための資料提出が決まった。

このように委員会は活発に研究活動を行な

っているが、健康政策にかかわる問題の広範さから、研究は長期的に継続される必要があると考えられる。尚、今期委員会の報告書の作成は61年度末になる予定である。

#### 健康政策研究委員会委員

開原成允 小泉 明

高田 勲 武見敬三

田村貞雄 中山昌作

西岡久寿弥 松田 朗

弓倉藤楠

#### 協力員

土屋健三郎 三藤邦彦

吉川 暉 中村 賢

## 第2回武見国際シンポジウム・プログラム

ハーバード大学公衆衛生大学院武見国際保健学講座の第2回シンポジウムが、来る5月20日より22日まで、アメリカ、ポストシで開催される。

ハーバード側の説明によれば、今回のシンポジウムの基本的目的は、国際的経済調整と、発展途上国における保健ならびに栄養との関係を考えることにある。国際的経済圧力が、いかに保健ならびに栄養の改善の可能性を制約するか。国際的経済抑制に対抗して、保健ならびに栄養政策をどう変えれば進歩出来るであろうか。経済政策を変えることによって、必要な経済的調整を行ないながら、保健ならびに栄養を守ることが出来るであろうか。これ等がシンポジウムの基本問題である。

\* \* \* \*

プログラムは以下のごとくである。

#### May 20, Evening

Reception and Dinner

Opening Address: Richard Jolly,  
Deputy Executive Director,  
UNICEF

#### May 21, Morning

SESSION I: The Nature of Economic Adjustments and Their Effects on Health and Nutrition  
"The Economic Setting: Past and Prospective"

Lance Taylor, Prof. of Economics,  
M.I.T.

"The Impact of Economic Adjustments on Health and Nutrition"

Jere Behrman, Prof. of Economics, University of Pennsylvania

"A Case Study from the Third World: Sri Lanka"

S. Samarasinghe, Takemi Fellow, Harvard School of Public Health  
Presentation of papers, followed by prepared comments and general discussion.

May 21, Afternoon

SESSION II : Alternatives for Food and Nutrition policy

"Overview of Policy Alternatives"  
Peter Timmer, Prof. of Agriculture and Business, Harvard Business School

"The Experience with Food Distribution"

Per Pinstrup-Andersen, Consumption and Nutrition Program Director, International Food Policy Research Institute

"The Special Case of Africa"  
Andrew Kamarck, Consultant

"Epidemiology of Hunger in Africa"  
Takateru Ohse, Consultant

"Toward Basic Human Need in Relation to Health and Nutrition: A New Strategy of Economic Assistance"

Yukio Kaneko and Koh'ichi Nihei,

Hiroshima University of Economics

Presentation of papers, followed by discussion groups

May 22, Morning

SESSION III : Alternatives for Health Policy

"Overview of Policy Alternatives"  
Lincoln Chen, Representative of the Ford Foundation for India, Nepal and Sri Lanka

"Mobilizing Financial Resources"  
Donald Shepard, Associate Professor of Operations Management and Operations Research, Harvard School of Public Health

"The Crucial Role of Women"  
Mayra Buvinic and Joanne Leslie, International Center for Research on Women, Washington, D.C.

"Obtaining Pharmaceuticals"  
Adrian Griffiths, Health Management Institute, Geneva

"Selecting Technology"  
Seymour Perry, Institute for Health Policy Analysis, Technology Section, Georgetown University

Presentation of papers, followed by discussion groups

May 22, Afternoon

SESSION IV : Summary and Con-

clusions  
Reports from discussion groups,  
overall summary, and general  
discussion

\* \* \* \*

なお、日本から、生存科学研究所代表、シンポジスト、コメンテーター等として以下の方々が参加する。(敬称略)

大来左武郎

大瀬貴光

金子敬生

武見英子

武見敬三

土屋健三郎

豊川裕之

国際大学学長

日本熱帯医学協会顧問

広島経済大学教授

故武見太郎博士夫人

東海大学経済学部講師

産業医科大学学長

東京大学医学部助教授

## 武見太郎先生文献目録の作成計画

藤川 正信

### 1. 序

武見先生が御計画になった生存科学の理念の確立とその研究は、一方では財団法人生存科学研究所の形をとって、ハーバード大学公衆衛生大学院との提携をはじめとする国際的機能を発揮しつつ、広い分野を統合した研究活動の推進に寄与していますが、他方では、武見記念生存科学研究基金の形をとって行われています。これはすべて武見先生の人類の将来に対する確固とした哲学と深い洞察力の結果であり、先生の偉大さに今さらながら強い感銘を受けているのは、武見先生を存じあげている者すべてに共通することだと思われま

す。われわれすべてに人間の在り方について御教示下さった武見先生の思想と研究の内容は、その思考の展開の様相についても、その学識の広さと深さについても、一朝一夕に理解しうるものではありません。この点に関し、武見基金の活動の一部として先生の業績をなんらかの形でまとめられないかというお話をうかがった時に、私の頭に浮んだのは次のような内容でありました。

すなわち、武見先生は思索の人でありつゝ行動の人であり、重要な局面に焦点を当てながら同時に巨視的な立場からの判断を下し、御専門の医学を単に学問研究の一領域に留めることなく哲学・宗教から社会・経済に至る人間の機能や活動との関連を促えることによって、真に人間の学問の確立を図られたと解することができるので、通常の業績一覧とか文献目録では、先生の業績をうかがい知ることとはできないということでした。

この考えに基づいて、後述の形式と内容を持つ文献目録作成の案を提示させていただき、方針として御賛同いただいたので現在その具体的作業をすすめています。また、この原案の策定に当っては亀井康一郎、小平敦、武見敬三、田村貞雄、中山昌作、藤澤正輝の諸先生の御意見をうかがい、さらに武見文庫の収蔵目録との関係で東海大学の佐々木正五先生をはじめ同大学附属図書館伊勢原分館長の三富利夫先生および関係者の方々に連絡をとらせていただくことができ、まことに有難く思っています。

## 2. 文献目録作成内容案

### 2.1 文献目録の収録範囲

- 1) 著書
- 2) 編集・監修書  
編集、監修書の前書き、序文等を含む
- 3) 序、序文、前書き  
上記1)、2)以外の書籍等
- 4) 論文  
共著を含む
- 5) 講演、講座
- 6) 会議録  
各種委員会、シンポジウム、会議、研究会等の記録
- 7) 対談、座談会
- 8) インタビュー
- 9) その他  
総会雑誌、週刊誌、新聞等の掲載記事

### 2.2 文献目録の形式

- 1) 年表 (別表1参照)
  - ①年表は、文献発表の年代順リストを兼ねるものとする。
  - ②各文献には、最初のものから一連番号を付与し、それを固有番号とする。
  - ③年表は、1890年4月1日、第一回日本医学会開催を初めとする。(変更可)  
例：医学校開設 1872-9；医学専門学校開校 1901-4
  - ④年表の欄は、次の項目により構成される。
    - a. 年号(西暦)、月、日

- b. 文献
- c. 武見先生の行動
- d. 医療行政、機関
- e. 政治、社会一般
- f. 学術、文化
- g. 国外事情

注) 年表の作成に当っては、近代日本総合年表(岩波)、実録日本医師会(1983)の巻末、武見太郎・関係年表、国民医療年鑑等に基き、必要に応じてその他の年鑑類を参照する。

### 2) 文献分類目録

文献を内容により大項目、中項目に区分し、その中を発表年代順に配列する。分類に当っては、従来医師会統計課で行ってきた区分法を参照すると共に、武見文庫の分類法(NLNとLCの分類)と関連づけが可能な方式を採る。各文献の固有番号は、年表中の番号と一致させる。文献の詳細な内容は、各文献に約8個のキーワードを付し、それが次頁の「文献索引」により検索できるようにする。

### 3) 文献索引

共著者、共編者、書名等の固有名詞と共に、表題中の重要語句ならびに内容を望ましい観点から検索できる語句を索引語とする。参照は、「ヲ見ヨ」と「モ見ヨ」の2種類とする。

索引語を含む文献は、既述の固有番号により指示される。

### 3. 今後の作業の進め方

現在までに確認できている文献の総数は約500件ではありますが、この他に数多くの資料や文献が存在すると思われます。そのために、入力を一応完了し、コンピュータで処理した

アウトプットのうち上記2で述べた1)②文献年代順リストと2)文献分類目録を「基金」を通じて配布し、追加・訂正の御教示を受けた上で決定稿として印刷に入ることを願っております。

なお、ファイルは更新が可能でありますから、一定期間を置いた後で増訂版を作成することも容易であり、関係各位の御意思により

将来の方針を策定していただければ何よりと存じます。

さらに、要望があれば、この文献目録の主たる項目をまとめた形で英文版を作成し、前記ハーバード大学をはじめ、世界に武見先生の業績を報告する計画もありうると考えております。

(1986. 04. 15)

年号(西歴) 月、日	文 献	行 動	医療行政、 機関	政治、 社会一般	学 術、 文 化	国外事情

(別表 1)

## エッセイズ・キュート

アメリカ議会で、バイオテクノロジーの輸出が大きな問題となっている。アメリカの現行法律では、バイオテクノロジーによって新しく開発された薬品は、まずアメリカで使用が許可された後でなければ、その輸出は認められていない。例え、その薬品が相手国ですら使用が許可されていても駄目である。

この分野で厳しい目をひかせているアメリカ政府の食品医薬局(FDA)は、サリドマイドを未然に防いだという実績もあって新薬の使用許可には常に慎重である。

アメリカ政府や業界では、このままではせっかく世界をリードしているアメリカのバイ

オテクノロジーが、外国——とくに日本と西ドイツ——に追いつかれてしまうとして、議会のなかに輸出を認めようという法律改正の動きが出てきた。

議会の慎重論者は「薬品の検査機能の乏しい途上国で新薬が乱用されるおそれがある」と反対しているが、「薬品の検査能力の高い先進工業国にだけ輸出を認める」と妥協案がでている。

バイオテクノロジーの将来性は限らないが、一部に危険性をひそめていることも事実だ。国際的なルール作りが必要になってきた。

(〇)

## 維持会員だより

### 迂余曲折

寄生虫予防運動の初期（昭和24年）から私は武見先生にお世話になった。この運動は慶応の小泉日 教授が東京で始められたのだが、武見先生は小泉教授の信頼が篤かったので、この関係で私も武見先生に近づくようになった。その頃私は寄生虫予防協会の渉外主任のような仕事をしていた。

私どもが最初の社屋（東京京橋）のGHQ 拂下げを画策していたとき一武見先生は日本政府工作がうまくいくよう一裏でさまざまな手工を私に授けた。この工作がうまくいって拂下げには成功したが、私たちには、全く購入資金はない。仕方なく武見先生は自腹を切って予約金の半分を支拂ってくれた（この建物はいまは東京市ヶ谷に移って、保健会館となっている）。

東京で始めた寄生虫予防の仕事は、学会や厚生省の支持もあって、全国的に伸び、五年後には日本寄生虫予防会という全国組織にまで発展した。しかし日本経済の発展とともに国民生活も上昇し、それに私どもの全国運動もあって、戦後あれほど高率だった寄生虫の感染率も急速に低下した。このままでは折角の全国組織も壊滅する。

そこで寄生虫予防を、将来どうもっていくかが問題となった。そこで討論の末、寄生虫予防の特色である「集団検査」と「衛生教育」を二本立てとして、細菌・血液・尿・ガン等にまで拡大、疾病の早期発見・早期治療をスローガンとする予防医学活動にすることがきまった。昭和36・7年頃である。

幸いこの方向には賛成者も多く、財政的に

は千代田生命がスポンサーになってくれることになった。

さっそく、武見先生（当時は日本医師会会長）に相談した。が、言下に反対だといわれてしまった。寄生虫学者ばかりで、予防医学など、できるかというわけだ。先生への了解工作は、学会や千代田生命、さらには厚生省側からも行われた。しかし彼の拒絶は岩のように硬い。私は苦悩した。武見先生と私どもとの関係を考えれば、無理押しはできない。彼は私どもにとって恩人なのだ。ついに私どもは予防医学団体の設立を断念。スポンサーの千代田生命には陳謝して、資金返却をした。

が、私の執念はつづいた。予防医学に進んでいかなければ、寄生虫予防の全国団体は潰れる。なんとかしてこの構想は進めなければならぬ。が、考えると武見先生が日本医師会会長であることをおもえば、予防医学は、彼自身の将来構想の一環となっているかも知れない。とすれば、我々のいう予防医学は、すでに彼の聖域になっているのかも知れない。私は全くのジレンマの中に立った。

私は自分の頭を冷すため、ヨーロッパ旅行に出た。「くやしさ」「無念」に湧き立つおもいであった。

2年すぎた。

厚生省の友人たちが、アドバイスをしてくれた。予防医学の構想を、ずっと小さくして発足したら、というのである。そこで私は地方の支部を予防医学に転換させることから始めた。神奈川、愛媛をつくり、その連合体として、漸次、全国支部を巻き込み、全国組織

にそだてあげていくという戦術だ。こうして昭和42年、予防医学事業中央会ができた。

事務局は東京の私の組織の中におき、発会もやらず、薄っぺらの機関誌刊行から始めた。これらの動きについては、私から直接には武見先生には知らせなかった。

中央団体がやっと財団法人になった。その頃からまた私の駿河台ゆきは始まった。時間をかけ、「ナシ崩し」に、武見先生の承認を得ようというわけである。その頃私は国際協力の仕事も始めていたので、話題は専ら海外問題であった。彼は私にまたいくつかのアドバイスを与えた。座談会にも出てくれたし、海外セミナーでスピーチもしてくれた。

その間予防医学の全国運動は年々つよくなってきた。厚生省も資金ルートまでチエをつけてくれた。

ある年（昭和50年）の全国大会（浦和）の時、特別講演の中で、彼は私を激賞した。私も仰天し、満員の参会者が喜んだ。武見太郎氏と私とのヒビワレは、その頃、関係者の間では有名な話になっていたからだ。ついには予防医学事業中央会の顧問も引きうけてくれた。

——想え起せば、迂余曲折の関係で、このために私の人間もかなり育ったものと思う。

（会員・東京都 国井長次郎）

## ニュース・オブ・ニュース

### 第4回理事会

2月14日午後2時より、大手町経団連ビルにおいて、昭和60年度第4回理事会が開催され、茅理事長、両副理事長以下の出席のもとに、昭和61年度事業計画案および収支予算案、試験研究法人継続のための申請提出書類等に<sup>\*</sup>き協議された。

事業は、「調査研究」と「普及、助成、国際交流」の2本の柱からなる。

I] 「調査研究」は、60年度末までに整備した事業計画、推進、管理体制によって、より計画的に以下の事業を展開していく。

(1) 自主研究として、「健康政策」、「医薬品産業問題」、その他61年度からの多様な調査研究、「生存科学研究会」等。

(2) ハーバード大学と提携した国際事業として、ハーバード大学とのアグリメント

締結、初代武見プロフェッサー就任等、60年度内に基礎を固めたハーバード大学武見講座の永続のための支援、61年度ボストンで行なわれる国際シンポジウムへの全面参加、さらに2年後の日本でのシンポジウム開催に備<sup>\*</sup>えての研究と準備等。

(3) 受託事業として、60年度に科学技術庁から委託された「科学技術総合研究」等、生存科学が広く人類社会の需要に応えるため各種受託研究の受入れ。

II] 「普及、助成、国際交流」は、それぞれの研究部門でも企画される外、60年度に開催した「ハーバード大学公衆衛生大学院、武見講座特別記念講演会」や、大阪での第1回講演会「ニューロサイエンスの新しい展開」のような講演会、ゼミナー、シンポジウム、

ならびに研究に対する資金援助、国際交流を、全体を通じた形でも行なわれる。

このような計画を推進するため、収支全科目の再編を行ない、基金、会員、広報、事業受託、庶務会計を総合的に、そして従来より以上に意欲的な企画と管理が行なわれるよう努力する。

以上の「事業計画案」と、それを支える「収支予算案」が協議され、他の議題と共に全員に承認された。

収支予算に関連しては、今迄以上に堅実になって来たことと、研究事業の発展をより強力に行なえるためには、募金の初期計画達成の推進、維持会員の拡大による継続寄付の増加を目指して、一同の一層の努力が必要であると話合いが真剣に行なわれた。

#### 試験研究法人継続成る

財団法人生存科学研究所は、所得税法ならびに法人税法上の試験研究法人として認められ、本研究所へ寄付をされる方への税法上の特典が与えられている。2年を経過してその継続のための再申請をしていたが、3月26日付をもって再び試験研究法人としての証明が

交付され、今後とも寄付に際しての特典が継続されることになった。

\* \* \* \*

#### 第4回「科学と人間」会議

4月17日、既に桜も散り始めた東京の、サミットを控えて警戒の厳重なアメリカ大使館近くのホテル・オークラにおいて、第4回「科学と人間」の会議が開催された。今回の話題は「医療と人間」で、国立ガンセンター総長の杉村隆委員が話された。(会議の内容は別に報告の予定)

\* \* \* \*

#### 第27回生存科学研究会

前号にて予報のとおり、4月19日午後2時より、経団連ビルにおいて、第27回生存科学研究会が開催された。

ハイテクノロジーと生存科学の第2回目として、今回は機械技術研究所遠隔制御課長の舘先生から「次世代ロボットについて」、東京大学精密機械工学科教授舟久保先生から「長寿社会と技術支援について」が講演された。(詳細は次号)

### 編集後記

新年度の事業計画、収支予算が決まり、研究所の活動も益々活発に行なわれ、広報も忙しくなります。

一方、今月は第2回武見国際シンポジウムがボストンで開催されます。関係者はその準備で多忙を極めていました。

ニュースで紹介するように3月1日、大阪で、初めての公開講演会が開催されました。嘗て武見先生が、日本医師会で開催したライ

フサイエンス学会のように、広い分野の方々の参加を得ての学際的な討論が出来るこのような催しは、生存科学の実践的研究という、研究所の事業の重要な分野になるでしょう。

「科学と人間」会議のように、限られた人数の会議の中で深く深く人間を掘下げてゆく作業と、広くそれを実践に結びつける活動と、生存科学のために二つが同時に進められています。